

平成 14 年 1 月 30 日

緑のこみちに江戸の面影をしのぶ

雑司ヶ谷霊園周回道路の古名表示案内板を地域住民たちが設置

本日 30 日、都立雑司ヶ谷霊園（南池袋 4-25）の外周に、江戸時代の古名とその由来を紹介する案内板 3 基が地域住民たちの手により設置された。

案内板を設置したのは同地域住民で組織する「雑司ヶ谷地区まちづくり協議会」と同協議会を母体に結成された「緑のこみちの会」のメンバーたち（ともに会長：伊藤 博さん）。

雑司ヶ谷地区は、阪神・淡路大震災後の平成 8 年度に都の防災都市づくり重点地区に指定され、都は崩落の危険性が高い霊園周辺の万年塀の改修工事を計画した。かねてより万年塀を撤去し、緑豊かな散策道を作ることにより防災避難道とするインナーリンク構想を提案していた同地区まちづくり協議会は、万年塀の代わりに鉄板のフェンスを設置する都の当初計画に対し、生け垣化への変更を求める地元住民の要望をまとめ、都に働きかけた。この要望を受け、都は平成 10 年度から 3 ヶ年かけ、霊園周辺約 1,000 メートルに生け垣（一部緑化フェンス）の整備工事を実施した。

「緑のこみちの会」は、第 1 期改修工事が完了した平成 11 年 3 月、緑豊かに生れ変わった生け垣を自分たちの手で維持管理しようと結成され、現在約 70 名の地域住民が参加している。毎月 1 回、霊園周辺の定期清掃や、草花の植栽などボランティア活動を続けており、今回の案内板設置の話もそうした活動を通じた会員間の交流の中から持ちあがった。

雑司ヶ谷地区は戦災を免れたこともあり、昔の道筋が今も残っているところが多い。霊園を周回する道路も、江戸時代の古地図『武蔵国豊島郡雑司谷村絵図』（明和九年・1772）に、鬼子母神道（きしもじんどう：霊園南側）、御鷹部屋道（おたかべやどう：霊園東側）、御鷹方御組屋敷道（おたかがたおくみやしきどう：霊園北側）の三つの古名が記されている。それぞれ、音羽道・護国寺裏門から鬼子母神に通じる道として利用されていたことや、徳川八代将軍吉宗が鷹狩りに用いる鷹の飼育所、そのための鷹匠や同心たちの住む組屋敷があったことに由来するもので、案内板にもそうした説明が紹介されている。

三つの古名それぞれを記した 3 基の案内板は、会員たちの手作り。両会の会長を兼ねる伊藤博さんがかつての仕事関係を通じ木材を調達、日光から取り寄せたヒノキとケヤキを用い、郷土史を研究している会員や木工が趣味の会員たちが協力して製作した。江戸時代の高札を模した形で、歴史の面影を感じさせるとともに、周囲の緑との調和も考えられている。都から設置許可がおりたことを受け、本日午前 10 時より会員たち自らが、霊園外周 3 ヶ所の生け垣の足元を掘り、約 2 時間かけて案内板を立てた。

雑司ヶ谷霊園は、夏目漱石・永井荷風・泉鏡花・竹久夢二など著名人の墓が多く、散策に訪れる人も多い。また、霊園から鬼子母神にかけての周辺はかつて寺町であったことがしのばれる面影が随所に残されており、周回道路の一部は都の「歴史と文化の散歩道」のルートにも重なっている。こうしたことから、同協議会では案内板の設置により、地域の人や散策に訪れる人々が、街の歴史を知る一助になればと期待を寄せている。会員のひとは、「街は郷土史の教室。街を歩くことで地域を理解し、愛着を深めて欲しいですね」と語っていた。

詳細：街づくり公社